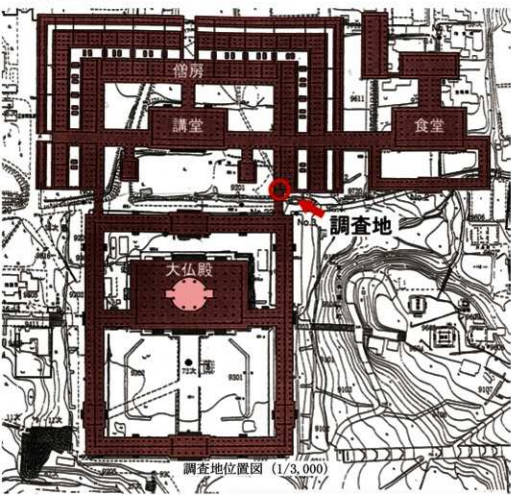
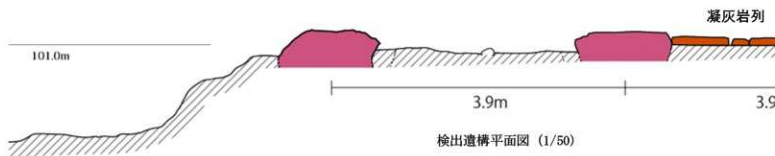
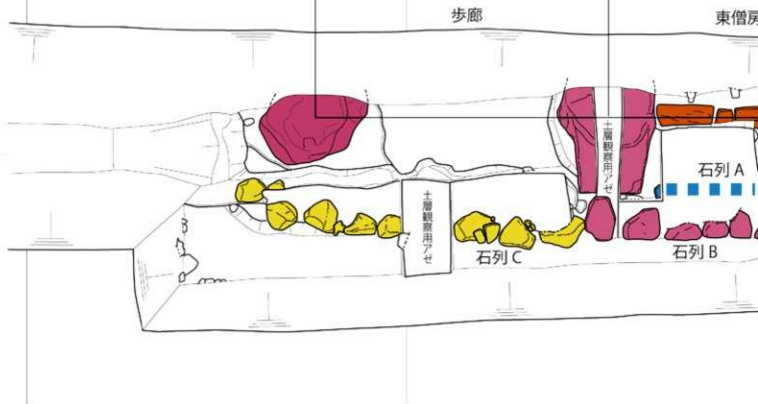


史跡東大寺旧境内
大仏殿北方地区の調査

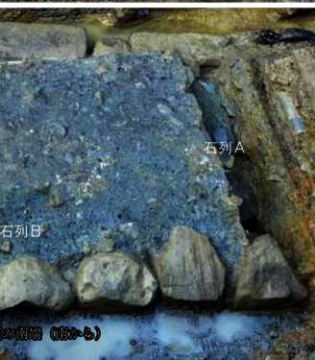
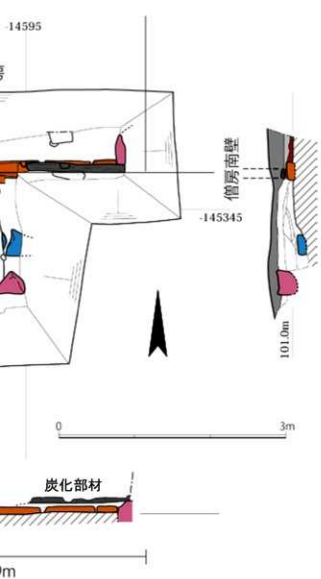


2011年 12月

奈良市教育委員会



-14595



史跡東大寺旧境内 大仏殿北方地区の調査

1. はじめに

調査地は奈良市雑司町406-1番地で、東大寺の大仏殿北側に位置します。公共下水道築造工事に先立って、平成23年7月21日から遺構の有無を確認するための事前調査を実施しています。これまでに大仏殿北側の東西道路北側に沿った下水道予定地の365㎡を調査しました。

東大寺の金堂である大仏殿の北側には講堂を中心にそれを取り囲むように東・西と北側に僧房(三面僧房)がありました。講堂の礎石は今も地表に露出しており、その大きさがわかりますが、僧侶が暮らした僧房の跡は今まったく見ることができません。今回の発掘調査では、この東大寺僧房のうち東室と呼ばれる東僧房(太房)の南端を初めて確認することができました。

2. 調査成果の概要

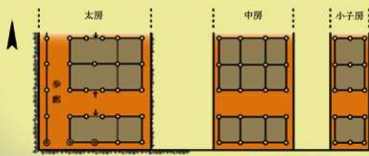
発掘調査で検出した礎石は、太房南端の三つの礎石で、柱間は3.9m(約13尺)あります。西から二つめと三つめの礎石間には凝灰岩の切石が並べられ、その上には焼けて炭化した部材(幅10cm・厚さ6~8cm・長さ137cm以上)が見つかりました。凝灰岩切石列の上は壁で、西から一つめと二つめの礎石の間は空いており、太房の西側一間は通路(歩廊)であったことがわかります。床面は焼けた土で覆われており、僧房が最後に焼け落ちた永正五(1508)年の火災のようすが生々しく残っています。礎石の南側約1.0mの位置には東西方向の石列Aがあり、ここが僧房基壇の南端と推定できます。石列Aの上につくられた石列Bは、溝として造り替えられたもので、通路だった西側一間分の石列Cは石の積み方がやや異なり、僧房焼失後に付け加えられたものとみられます。さらにこれらの遺構の上には永禄十(1567)年の兵火の時のものとみられる炭と焼土が厚く堆積しています。

また、僧房跡の西方の調査では、大仏殿と講堂の間には東大寺造営以前からある深い谷が平安時代まで残っていたことも確認できました。この谷の底には、奈良時代の大仏鑄造時の遺物を含む層が堆積しており、木炭、籾(ふいご)の羽口、溶銅、銅滴、銅滓、木簡、檜扇・転用硯などが出土しました。出土木簡には(表面)「口守 受籾 一口」・(裏面)「九月九日」と記された大仏の銅を溶かす籾(ふいご)に関わるものもあります。

3. まとめ

奈良時代に建てられた東大寺の僧房は、平安時代初めの延喜十七(917)年に講堂とともに全焼し、再建されますが、これは治承四(1180)年の兵火で焼失しました。鎌倉時代再建の僧房も室町時代の永正五年にまたも講堂とともに焼失し、その後は再建されませんでした。

今回の調査で検出した僧房の遺構は、鎌倉時代再建時のものとみられますが、奈良時代創建時の規模を受け継いでいるものとみられ、これまで不明な点の多かった東大寺僧房の位置や規模、その変遷を知るうえで貴重な資料を得ることができました。教学の研鑽に励んだ多くの学僧が暮らした壮大な僧房の遺跡は、現地表面にはほとんどその痕跡を残していませんが、東大寺の興亡の歴史を秘めて大仏殿北方地区の地下に良好に残されていたのです。



●今回検出した礎石

東僧房(東室)模式図



出土木簡